



本の源流再発見

美しい自然と昭和モダンが残るまち



京都府与謝郡与謝野町は、2006年に加悦町をはじめとする3町が合併して発足。周辺の宮津市、京丹後市、伊根町とともに日本遺産「300年を紡ぐ絹が織り成す丹後ちりめん回廊」に認定されています。丹後ちりめんの主産地の一つであり、1910年代から50年代まで織物産業の隆盛により大いににぎわいました。

天橋立 (宮津市・飛龍観)

File 11 京都府与謝郡与謝野町

300年の歴史を紡ぐ丹後ちりめんの里

与謝野町は、京都府の日本海側に位置する丹後地方に属し、酒吞童子伝説で知られている大江山連峰をはじめとする豊かな自然に恵まれています。丹後地方は「弁当忘れても、傘忘れるな」といわれるほど雨が多く、この気候が乾燥を嫌う絹織物生産に適していたことから、古代より絹織物が盛んでした。

江戸時代になると京都西陣で新たな絹織物「お召ちりめん」が生まれ、丹後の織物が売れなくなります。そこで、享保年間(1716~1736年)に、加悦のてごめやこえもん手米屋小右衛門など3人が京都西陣

でちりめんの技術を習得、門外不出とされていた技術を持ち帰ります。彼らはそれらを惜しみなく地域の人々に教え、ちりめんは丹後地方全体に広まりました。

以来、友禅染などの生地として和装文化を支えてきた丹後ちりめんですが、近年は水に濡れても縮みにくく摩擦に強いハイパーシルクや、気軽に使えるポリエステルちりめんなど新製品も開発され、進化し続けています。

丹後ちりめんの産地として発展したのが加悦谷です。交通機関に恵まれず、絹織物を京都市場へ運ぶ手



カフェトレイン蒸気屋

段を模索していました。1926年、ちりめん業者を中心とした町民823名の出資金を元に、旧国鉄の丹後山田駅から加悦駅までの5.7kmを結ぶ加悦鉄道が開業しました。このような住民主導で生まれた鉄道は全国的にも珍



▲ 加悦SL広場

日本で2番目に古いSLをはじめ、珍しい車両を27両も展示。各車両はNPO法人 加悦鐵道保存会の協力を得て、運営会社の宮津海陸運輸(株)によって整備されており、5台のディーゼーカーなどが今もイベント時などに運転されています



▲ 与謝野町立古墳公園

蛭子山古墳と作山(つくりやま)古墳を1600年前の姿に復元整備した古代歴史公園。埴輪(はにわ)や土器などの出土品を展示する「はにわ資料館」も併設



▲ 丹後ちりめん歴史館

ノギリ型三角屋根の工場を改装した歴史館は、昭和初期の面影を残して整備されました。燃糸(ねんし)機や織機(しょっき)の展示のほか体験講座も。ちりめんの切り売りやグッズなども販売



▲ ちりめん街道

与謝野町加悦の旧街道沿いには、ちりめん商家、工場、洋館の医院、銀行などが残り、かつてのにぎわいを今に伝えています

しく、当時の加悦の活気がうかがえます。その後、大江山でニッケル鉱石が発見され、加悦鉄道は搬出路線としても活躍しましたが、自動車の普及などにより1985年その歴史に幕を下ろしました。

古い機関車や客車を集めた「加悦SL広場」の一角には、「加悦鉄道資料館」として活用されている旧加悦駅舎や、改装した客車2両で飲食が楽しめる「カフェトレイン蒸気屋」があります。

日本三景の一つとして名高い「天橋立」。宮津市の天橋立ビューランドから望む天橋立は竜が天に昇るよう

に見えることから「飛龍観」として有名ですが、与謝野町の大内峠から望む天橋立も横一文字に見え「一字観」として四大観(4か所のビューポイント)となっています。ここには「大内峠一字観公園」として整備され、パノラマコテージやテントサイトなどの自然体験型施設もあります。

ココに注目

丹後ちりめんを使った「一色テキスタイル」のがまぐちや眼鏡ケース、バッグなどは、昔ながらの製法を守りながらも、気軽に使えるポリエステル製。



日立グループ事業所紹介

今回訪れた京都府には、株式会社日立プラントサービス 京都営業所があります。空調、製造プロセス、水処理施設などを中心に、各種プラント設備のエンジニアリングから、施工、維持保守サービスまでを一貫して提供しています。

株式会社日立プラントサービス 京都営業所

京都府京都市下京区四条通烏丸東入長刀鉾町20 四条烏丸FTスクエア 4F <http://www.hitachi-hps.co.jp/>